

2026年2月15日 降誕節第8主日礼拝メッセージ

「嵐の時も神は共におられる」

牛田匡牧師

聖書 マルコによる福音書 4章 35-41節

今回のお話は、イエス様が「突風を静めた」というお話でした。2週間前には、同じ4章から「種を蒔く人のたとえ」を読みました。4章の1節から、イエス様はガリラヤ湖のほとりで、「おびただしい数の群衆が御もとに集まって来たので、イエスは舟に乗って腰を下ろし、湖の上におられ、岸边にいる群衆たちに対して、たとえを用いて多くのことを話され」（4:1）ていました。「種を蒔く人のたとえ」から始まり、「灯と秤のたとえ」「成長する種のたとえ」「からし種のたとえ」など、いくつものたとえ話を語られた後、今回の35節に続きます。

夕方になったので、イエス様と弟子たちは、群衆を岸边に残したまま、「向こう岸へ渡ろう」と言って、舟を漕ぎ出しました（35-36）。しかし、それから間もなくして、激しい突風が起こり、波が舟の中にまで入り込み、舟は水浸しになりました（37）。それで弟子たちはうろたえて、眠っていたイエス様を起こして、助けを求め（38）、イエス様が風を吐りつけたら、すっかり嵐は止んだ（39）、という不思議なお話です。もちろん、今から2000年前の大昔の出来事ですから、正確な事実は分かりませんが、イエス様のことを「救い主（キリスト）」だと信じる人々が、口から口へと語り継いできた口頭伝承の物語ですから、いつの間にかに背びれや尾びれがくっついて、どんどん誇張されて来たのだらうと思われる。しかし、このようないわゆる「超自然現象」的な奇跡物語を、「人間には出来ないが、神には何でも出来る」（マルコ10:27 並行）として、書かれている文字通りに受け止めてよいのでしょうか。私はそうではないと考えています。

41節には「弟子たちは非常に恐れて、『一体この方はどなたなのだろう。風も湖さえも従うではないか』と互いに言った」とありますが、もしも歴史的事実として、イエス様が突風や嵐などの天候、自然現象を自由自在に操ることができるのだとしたら、イエス様は超能力者であって、私たちとは似ても似つかない存在になってしまいます。そのような方から「私についてきなさい」「私と同じようにやってみなさい」と言われても、それこそ「神には出来ても、人間には出来ない」となってしまい

ます。クリスマスに生まれたイエス様は、神が紛れもない人間になった出来事でした。しかも、最も無力で小さな赤ちゃんとして生まれたのは、イエス様は決して超能力者ではなかったということです。福音書を読む上で、私たちは常にそのことを忘れてはならないと思います。

このお話を改めて眺めてみると、不思議な点がいくつもあります。そもそも夕方から船を漕ぎ出して、夜の間に対岸まで渡るようなことは、実際にはあったのでしょうか。イエスの弟子となったシモン・ペトロとその兄弟アンデレも、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネも、皆ガリラヤ湖の漁師でした(マルコ 1:16-20)。魚を捕る漁は朝早く、夜の明ける前から舟を沖に出して、網を打ち、夜が明けてから岸に戻って水揚げし、朝食はそれからでした(ヨハネ 21:1-13)。ですから、ガリラヤ湖の漁師たちにとってみれば、夜の暗い中でも船を漕ぐのは慣れていて、それこそ「朝飯前」だったかもしれません。とはいえ、ガリラヤ湖は南北が20km、東西が最大で12kmもある大きな湖(面積約166 km²)です。日本の湖で言えば、島根県にある宍道湖(面積約79 km²)の約2倍のサイズで、香川県にある小豆島(面積約153 km²)丸々一個とほぼ同じサイズです。ですから、それだけの大きな湖の岸の近くで網を打つのと、対岸に渡るのとでは、やはり勝手が違ったのではないかと思います。

ガリラヤ湖の周囲は山に囲まれているために、山おろしの突風が吹くことはよくあるようです。そのような中、イエス様と弟子たちが乗った舟は、嵐に遭いました。けれども、イエス様は、艫(とも)、つまり船尾の方で、眠っておられました(38)。日中、おびただしい数の群衆に向かって、話続けられていたので、よほど疲れていたのでしょうか。それにしても嵐の中で、水浸しになりながらも、弟子たちから起こされるまで目覚めないなんて、すごいものです。ですが、これは事実というよりも、「平静に眠る姿」で「神に信頼している姿」(ヨブ 11:18-19、詩 3:6, 4:9)を表している表現だと考えられます。

またイエス様が風や湖に向かって「黙れ。静まれ」(39)と言って、叱りつけられたというのも、イエス様の超能力ではありません。そもそも、当時のヘブライ人の言語感覚では、「風」も、呼吸の「息」も、命やたましいの「霊」も、すべて同じ言葉「プネウマ(クルーアツハ)」でした。ですから、イエス様が「汚れた霊」に向かって、

「黙れ、この人から出ていけ」(1:25、5:8)と叱りつけて命じ、悪霊に取り憑かれた人の中から悪霊を追い出すのと同じように、「突風を引き起こしている悪霊を黙らせたなら、嵐は収まるはずだ」という感覚があったが故の創作でしょう。ですから、歴史的事実としてあったことは、「イエス様と弟子たちが舟でガリラヤ湖を渡っている間に、嵐に遭遇した。しかし、しばらくしたら嘘のように凧になった」ということだったのだろうと考えられます。

その中でもイエス様は終始、平静でした。そして慌てふためいていた弟子たちに、「どうして怖がるのか」(40)と言われたということでしょう。イエス様は弟子たちに対して、「まだ信仰がないのか」とも言われました。ここで言われている「信仰(信頼)」とは、何でしょうか。それは「イエス様は超能力を持った神様だから、きっとこの嵐をすばやく収めてくださる、と信じている」ということではなくて、むしろ嵐の時でも、どんな時でも「インマヌエル」(マタイ 1:23)の神様が共にいてくださるという信頼なのだと思います。

世界中で、場所を問わず、また今も昔も、時代を問わず、大雨や台風もあれば、震災があつたり、飢饉があつたりします。また事故に遭うことや、病気になることもあります。それらの不幸は、神様から見限られ、見放され、罰として与えられているのでしょうか。常に「清く正しく生きている人は、神様から祝福されて、いかなる不幸にも遭わずに、守られて一生涯を過ごす」のでしょうか。そのようないわゆる「因果応報」的な考え方は、大昔から世界中のあちこちで見られますし、「ヘブライ語聖書(旧約聖書)」の中にも見られます。しかし、現実には、清く正しい人であっても、災害に遭遇したり、事故に遭ったり、病気になったりします。現にイエス様もガリラヤ湖で嵐に遭遇しました。

もしも、イエス様が超能力を用いて、自然現象を自由自在に操ることができたのであったならば、始めから突風も嵐も起こさなければ良かったのに、それをあえて突風が起こることを許して、その上で弟子たちに「まだ信仰がないのか」と言って、戒められたのだとしたら、何とも回りくどい、性格の悪い神様になります。しかし、そうではありませんでした。たとえ乗っている舟が大揺れに揺れても、それでも神は共におられる。決して私のことを見捨てたり、見限ったりはしていない。だから、神が共にいてくださることを信じて、今できることをやってみること。それが「信仰」

「信頼して歩みを起こす」ということなのだと思います。

先週の衆議院議員選挙で、自民党が歴史的な大勝利を納めました。これで政策の内容が何であれ、強引に様々なことが数の論理で押し進められていきかねなくなりました。かつてのナチス・ドイツが、選挙によって政権を取り、「民意」に基づいて歴史的過ちを犯していったように、このままでは「戦争ができる国」へ、「戦争を行う国」に向かって、転がり落ちていきそうです。けれども、だからこそ、この現実から目を背けてはならない。無かったことにしてはならない。たとえ今、嵐の只中であつたとしても、そこにも神様が共にいてくださること、共に歩いて下さっていることに信頼して、今ここで出来ることを考えて、行動すること、それが求められているのだと思います。

イエス様が風と湖に対して言われた「黙れ、静まれ」(39)とは、突風を起こし、大波を起こしている悪霊に対して叱った言葉というよりも、嵐の中で心を騒がせてしまっている自分自身の心に対して、「心を騒がせてはならない。神を信じ、また私を信じなさい」(ヨハネ 14:1)と言われたイエス様の言葉を思い出すことではないでしょうか。また世の中で他人を踏みつけ、片隅に追いやり、その存在を小さくさせ、生きる力を失わせようとしている力、権力や暴力、悪に対して、口を閉ざすことなく、諦めないで「黙らない、静まらない」こと。抑圧する者たちに対する「黙れ、静まれ」という言葉なのではないかと思います。

健やかなる時だけではなく、病める時も、全ての命を大切にされる神様は共におられます。時に嵐に見舞われ、病気や災害に見舞われることがありますが、それらは神様から下された罰ではありません。いつでも、どこでも、「あなたと共に私はいる」と言ってくれる神様と共にあって、私たちは今日も立ち上がり、ここから歩みを進めて参ります。